



『INAX ライブミュージアム』を訪ねて

阿部 浩也

愛知県常滑市は千年の歴史を誇る焼き物の街として広く知られています。この伝統ある陶都に、土と焼き物の魅力を伝える文化施設、INAX ライブミュージアムがあります。「世界のタイル博物館」や創作体験ができる工房など6つの建物で構成されており、土と焼き物が織り成す多様な世界を体験・体感できる人気スポットとなっています。

INAX ライブミュージアムの敷地に入るとまず、レンガ造りの大煙突に目をうばわれます(図1)。視線を上へ上へといざなうその高さは70尺(約21m)。隣接する黒壁の建物には、かつて近代土管が大量に焼成されたレンガづくりの大きな窯が保存されています(図2)。塩釉という技法で焚かれた痕跡は飴色の彩となって窯内を照らしていました。この癒しの空間で



図1 古き常滑を代表する風景「レンガ煙突と黒壁建物(窯のある広場・資料館)」、右奥は世界のタイル博物館



図2 かつて大量の土管が焼成された倒焰式石炭窯にて(左から、谷*, LIXIL・磯村様, 阿部*, *編集委員)。

時々コンサートが開かれるそうです。

「世界のタイル博物館」は、紀元前から近代まで、世界の装飾タイル約1000点を展示し、その発展の歴史を紹介する博物館です。1階の体感コーナーでは、エポックメイキングな時代のタイル空間が再現されています。約5万本のクレイペグ(タイルの原型)からなるモザイク装飾壁(BC3500年頃, 図3)、エジプト・ピラミッドの青タイルが張られた地下空間(BC2650年頃)、イスラームのタイル張りドーム天井(9世紀, 図4)。信仰と深く結びついたタイル空間では、壮麗で畏敬の念を起こさせるような装飾美に包まれました。

ところで、有名なフェルメールの「ミルクを注ぐ女」に、デルフト焼のタイルも描かれていることをご存知でしょうか? タイルが人々の生活の場に登場したのは17世紀のオランダ。再現されたオランダタイル空間では一転して生活の匂いが漂っていました。

タイル博物館の2階には世界最古のタイルをはじめ(図5)、地域や文化、時代により、さまざまな装飾タイルが展示されています。宝石箱のような館内で、ひととき美しいと感じたタイルの一つが19世紀のイギリス・ヴィクトリア時代に作製された単彩レリーフタイル(図6)。透明釉を用いる技法で、焼成の過程で凸凹にそって釉の濃淡が生まれ、これが立体感を際立たせています。タイルづくりの歴史についても楽しく学びました。



図3 再現された約5500年前のメソポタミアの装飾壁(約5万本の手作りのクレイペグが使用、世界のタイル博物館)



図4 再現されたイスラームのドーム天井、このタイル空間はまるで装飾の宇宙(世界のタイル博物館)

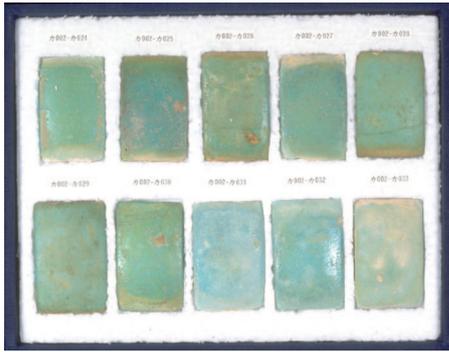


図5 世界最古のエジプト・ファイアンス・タイル（約4650年前），天然ソーダと酸化銅を混ぜて施釉（世界のタイル博物館）



図6 19世紀イギリス・ヴィクトリア時代に作製された緑色釉動物文レリーフタイル，エマイユ・オンブラン手法による陰影表現が美しい（世界のタイル博物館）

2012年4月に新しくオープンした「建築陶器のはじまり館」にも足を運びました。ここでは日本を代表するテラコッタ・コレクションが展示されています。特に目を引いたのは、有名なフランク・ロイド・ライト設計の「帝国ホテル旧本館」を装飾したテラコッタ。土管や朱泥急須などから代表的な常滑焼は赤褐色と思われがちですが、このテラコッタは黄色。黄色をもたらす陶土は知多半島の内海という地域で採掘されたそうです。当時、帝国ホテル煉瓦製作所の技術顧問としてテラコッタ・タイルの製造に携わったのが伊奈初之丞・長三郎親子でした。帝国ホテルが完成した翌年に、長三郎は、それまでの伊奈製陶所の規模と資本を増強して伊奈製陶(株)(後のINAX, 現LIXIL)を設立しました。

同敷地内の「ものづくり工房」のマイスターたちの



図7 「帝国ホテル旧本館」の装飾タイルのレプリカ，有名なフランク・ロイド・ライトの土のデザインをINAXライブミュージアム内の「ものづくり工房」で再現



図8 世界のタイル博物館のホールにて，右から，野田*，LIXIL・井須様，磯村様，谷*，阿部*，*編集委員

手で、「帝国ホテル旧本館」の黄色いタイルが再現されています（図7）。それは装飾と機能を併せ持つフランク・ロイド・ライトの土のデザイン。この建物内にはまた、INAXがこれまで手がけてきた製品やその資料を見ることができます。上海万博で有名になった金色のトイレも展示されていました。

最後に訪れました「土・どろんこ館」では、これまでに延べ6万人以上の方が体験したという「光るどろんだんごづくり」に挑戦。磨くと光ってくる土にどんどん本気になり、本当に楽しくおもしろい。自らデザインした独特のだんごを片手に、土の魅力を味わいながらINAXライブミュージアムを後にしました。

今回の訪問では、LIXILの磯村 司さんと井須紀文さんをはじめ、多くの方にお世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

■筆者紹介 阿部 浩也

大阪大学接合科学研究所 准教授。現在、コロイドプロセスや機能性流体、エネルギー関連材料などの研究開発に従事。
[連絡先] 〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘11-1 大阪大学接合科学研究所 スマートプロセス研究センター

[投稿歓迎－編集委員会では「ほっと」spring 欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]